望ましい保育者像の研究*

—SIVによる検討—

平　松　芳　樹

問　題

理想的保育者をめぐって，その資質の条件を列挙したり，望ましい特性や理想的な態度を評定する調査は多くなされている。しかしこれらの試みは，いわば望ましい保育者に要請される徳目的なものを挙げることにはなっても，これを実践する保育者自身のパーソナリティとどのように結びつくかとか，さらには具体的保育・教育行動との連関等についてはあまり明らかにされていない。

菊池（1972a，1972b）は，理想的教師像の調査にKG-SIV**等を適用して，従来の資料とはちがった性質の新しい資料を提供し，従来の調査の欠陥を補う研究を試みている。

筆者はこのKG-SIVを用いて，保育者を志望する短大学生と現職の保育者（保育所保母並びに幼稚園教諭）を調査対象に，望ましい保育者像を，単なる徳目的なものでなくパーソナリティ特性と結びついてあらわれると考えられる資料を得て検討を加えてみる。

方　法

調査用紙は対人関係価値尺度の日本版（KG-SIV）を用いた。これの構成を要約すると，因子分析の結果から設定された6つの価値を，それぞれの領域に含まれる90項目のステートメントに表現し，それらの重要さを相対的に強制選択させる方法をとることによって，個人における対人関係場面での行動判断の枠組を明らかにしようとするものであるが，詳細は他の論文（Gordon，1960；菊池，1963；平松，1972，1973）にゆずる。ただし参考までにKG-SIVで測定される諸価値の内容を以下に記す。

支持（S：Support）他の人々から理解をもって扱われ，勇気づけられる。親切や思いやりをもって扱われる。

同調（C：Conformity）きちんと規則に従い，社会的に当を得た行動をする。他の人々から受け入れられる妥当な行動をする。

承認（R：Recognition）他の人々から尊敬され，賞讃され，重要な存在として考えられる。他の人々の好ましい注意をひき，承認をうける。

独立（I：Independence）自分の思うように行動する権利をもつ。自分自身の決定を自由にする。自分独自のやり方で行動できる。

博愛（B：Benevolence）他の人々のためになることをする。共に分けあい不幸な人々に助力の手をさしのべ，寛大である。

---

* The study of ideal teacher of child nursing by the SIV.

** Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Values.

指導（L：Leadership）他の人々の行動に責任をもつ。他の人々の上に立つ。リーダーとしての位置につく。

回答方法はイメージ調査法によった。すなわち，望ましい保育者像を心に描き，あるいは望ましい保育者の立場に立って各設問に反応するというものであり，これによって間接的に自分の態度が表明されることが期待される。

調査対象　不完全資料を除いた有効資料は総数267名分であり，その内訳は保育専攻学生156名と現場の保育者111名である。前者はすべて中国短期大学保育科2年次学生であり，調査は1974年10月に実施した。既に保母資格修得のための実習は終え，幼稚園実習も目前にした，かなり保育者としての教養は深まり自覚もできてきている時期である。後者は主に岡山・倉敷市内の保育園（6園，48名）と幼稚園（5園，63名）の現職保育者である。調査の実施は1974年11月から12月にかけて各園に依頼し，後日回収した。年齢は20歳から66歳まで，勤続年数も数カ月から25年までと相当広範囲であった。

結果と考察

まず，全資料を総合したＳＩＶ得点の平均値と標準偏差を価値領域別にみるとTable 1 の通りである。

Table 1　**望ましい保育者像・総合資料**　（ＳＩＶ平均値と標準偏差）

	n	S	C	R	I	B	L
全資料	267	15.03 (4.02)	19.19 (3.94)	9.30 (3.36)	13.22 (5.24)	21.69 (4.97)	11.57 (3.69)

望ましい保育者についての保育科学生と現職保育者の平均的イメージが示されている。一般的に博愛(B)と同調(C)得点が高く，承認(R)得点が低く評価されている。すなわち，(B)「他の人々のためになることをし，共に分けあい，他人に寛大である。」ことと(C)「きちんとした規則に従い，社会的に妥当なことをする。」ことが大切にされる一方(R)「他の人々からの尊敬や賞讃を求める。」ことは重要視しないということになる。

次にこれを学生と現職保育者との2グループに分けて，互いに比較するとTable 2 の如くである。

Table 2　**学生と現職とのグループ別ＳＩＶ平均値と標準偏差および差の検定**

グループ	n	S	C	R	I	B	L
学生	156	14.90 (4.14)	18.76 (4.23)	9.69 (3.20)	12.75 (4.88)	22.64 (4.81)	11.26 (3.55)
現職	111	15.22 (3.82)	19.78 (3.49)	8.75 (3.50)	13.89 (5.65)	20.36 (4.88)	12.00 (3.88)
差		−0.32	−1.02	0.94	−1.14	2.28	−0.74
t (df=295)		0.641	2.077	2.266	1.756	3.782	1.610
有意水準		ns	0.05	0.05	ns(0.1)	0.001	ns

有意差があるのは，同調(C)・承認(R)・博愛(B)であり，学生グループと現職グループとのイメ

ジの相違がこの面にあらわれているといえる。

学生グループでは博愛(B)と承認(R)の得点で高く，現職グループではこれらの得点が低くなり，同調(C)得点が高くなっている。学生時代に描く理想的保育者のイメージは(B)「不幸な人々と友人になってあげる。みんなに心から親切にしてあげる。」ことを重要視するとともに，(R)「他の人々から尊敬され，賞讃され，重要な存在と考えられる。他の人々が私のすることに注目する」ことの価値を高く評価している。しかし現場で日々の保育にたずさわるようになると，これらの価値に対する評価は相対的に低くなる。その分だけ別のところへウエイトが移ると考えられる。つまり他の面へ目が向けられるようになったといえる。それは(C)「規則や規定をきちんと守る。社会的にみとめられた慣習に従って行為しようとする」ことが大切にされる。また偏差が大きいため有意水準には達しないが(I)「自分独自のやり方で行動できる。他人から命令されない立場にたつ」ことを重視するようになる傾向がみられる。これらを換言すれば，組織体を構成する一員としての責任を重くみるとともに自分の責任において仕事をすることが要請されるようになるものと考えられる。

なお，B得点が減少するとはいえ相当高水準にあるのであって，最高位に評価されている。これは筆者が先に学生の調査を実施して検討した場合にも特徴的にあらわれていた。この時は理想像として調査したものではなかったが，保育科学生のB得点はその他の科の学生より有意に高かった。そしてまた保育科学生でも学年進行とともにB得点は減少する傾向がみられた（平松，1972，1973）。このB得点の減少傾向は他の研究の中でも認められており（Gordon & Mensh, 1962；大羽他，1971），いずれも学年進行とともに理想主義的な傾向から現実的になるという発達的変化として考察されている。

Table 3　**各園別望ましい保育者像**（ＳＩＶ平均値と標準偏差）

園　別	n	S	C	R	I	B	L
A保育園	19	13.47 (3.85)	20.84 (3.89)	9.89 (2.47)	12.00 (4.04)	21.37 (4.60)	12.42 (3.17)
B　〃	11	16.27 (3.54)	18.73 (3.94)	10.00 (3.61)	12.09 (5.43)	19.82 (4.89)	13.09 (4.59)
C　〃	7	15.86 (4.55)	20.00 (4.24)	6.71 (2.08)	20.43 (6.99)	19.14 (5.65)	7.86 (3.43)
D　〃	6	16.17 (2.62)	17.67 (3.96)	10.67 (3.37)	9.83 (2.65)	20.33 (5.87)	15.33 (5.29)
E　〃	4	13.75 (2.06)	22.25 (3.30)	10.00 (4.76)	12.25 (7.50)	21.25 (2.87)	10.50 (4.44)
F　〃	1	19.00	24.00	5.00	12.00	20.00	10.00
G幼稚園	18	12.50 (3.50)	20.89 (3.23)	7.00 (4.06)	14.11 (4.27)	23.56 (3.68)	11.94 (3.65)
H　〃	13	16.92 (3.09)	19.23 (1.97)	9.85 (3.77)	13.77 (4.98)	18.54 (5.89)	11.69 (3.53)
I　〃	12	16.33 (3.59)	18.58 (3.60)	8.83 (2.26)	15.75 (5.35)	19.75 (5.07)	10.57 (3.31)
J　〃	10	16.00 (2.98)	19.20 (3.22)	6.90 (3.25)	17.30 (6.57)	18.70 (5.29)	11.90 (3.41)
K　〃	10	17.10 (5.00)	19.40 (2.80)	8.80 (3.99)	12.30 (6.77)	18.60 (3.24)	13.80 (3.82)

Table 4　　保育園と幼稚園とのグループ別ＳＩＶ平均値と標準偏差および差の検定

グループ	n	S	C	R	I	B	L
保育園	48	14.94 (3.62)	20.02 (3.99)	9.46 (3.18)	13.00 (5.77)	20.52 (4.72)	12.06 (4.33)
幼稚園	63	15.43 (3.99)	19.60 (3.07)	8.21 (3.66)	14.57 (5.51)	20.24 (5.02)	11.95 (3.56)
差		−0.49	0.42	1.25	−1.57	0.28	0.11
有意水準		ns	ns	ns	ns	ns	ns

ところで，現職グループは学生グループと比較するために概括したのであるが，職場あるいは年齢層のちがいによる理想像の差も予想されるので，この点を分析してみた。

Table 3 には各保育園・幼稚園毎の価値領域別平均値及び標準偏差を一覧し，Table 4 には保育園と幼稚園とのグループ別の比較も試みた。

各園毎にイメージのちがいがあることがわかるが，博愛(B)あるいは同調(C)を重要視する傾向は一貫してみられる。各園の細かい分析は試みないが，それぞれの園の特色があらわれていると考えられる。また，保育園と幼稚園のグループ別比較では，どの価値領域にも有意差がみられなかった。これらのことから，各職場毎に多少のちがいはみられるが，もっと大きいグループとしての保育園と幼稚園とではほぼ共通した望ましい保育者のイメージが描かれているといえる。

最後に，学生の資料も加えて年齢層による望ましい保育者像のちがいを検討してみる。学生の人数は多いがすべて20歳であり，１グループとした。現職保育者は20歳代前半（20〜24歳），同後半（25〜29歳），30歳代（30〜39歳）および40歳以上（40〜65歳）の４グループに分類した。Table 5 にはこの５グループのＳＩＶ平均値と標準偏差を一覧して示す。そして各グループ相互間の差およびその検定をＳＩＶの６つの価値領域別に行なった。結果は Table 6 に示す通りである。また Fig. 1 に年齢層別の望ましい保育者のイメージをＳＩＶ平均得点で各価値の相対的位置を図示し，その発達的変化の考察の参考とした。

Table 5　　年齢層別望ましい保育者像（ＳＩＶ平均値と標準偏差）

グループ	n	S	C	R	I	B	L
Ⅰ 学生 20歳	156	14.90 (4.14)	18.76 (4.23)	9.69 (3.20)	12.75 (4.88)	22.64 (4,81)	11.26 (3.55)
Ⅱ 現職 20〜24歳	51	15.59 (4.01)	19.65 (3.71)	9.08 (3.16)	13.53 (5.11)	20.84 (4.45)	11.31 (3.56)
Ⅲ 現職 25〜29歳	31	15.94 (3.46)	19.45 (3.36)	8.03 (3.64)	15.42 (6.46)	19.58 (5.39)	11.58 (4.15)
Ⅳ 現職 30〜39歳	16	13.38 (3.74)	21.25 (3.51)	8.44 (3.81)	13.19 (5.86)	21.44 (4.93)	12.31 (3.43)
Ⅴ 現職 40〜65歳	13	14.31 (3.49)	19.31 (2.41)	9.54 (4.15)	12.54 (5.22)	19.00 (5.20)	15.31 (3.69)

Table 6　　年齢層・価値領域別ＳＩＶ平均値の差の検定

		Ⅰ-Ⅱ	Ⅰ-Ⅲ	Ⅰ-Ⅳ	Ⅰ-Ⅴ	Ⅱ-Ⅲ	Ⅱ-Ⅳ	Ⅱ-Ⅴ	Ⅲ-Ⅳ	Ⅲ-Ⅴ	Ⅳ-Ⅴ
S	差	−0.69	−1.04	1.52	0.59	−0.35	2.21	1.28	2.56	1.63	−0.93
	t	1.036	1.303	1.472	0.496	0.398	1.925	1.038	2.287	1.389	0.663
	df	205	185	170	167	80	65	62	45	42	27
	level	ns	ns(0.2)	ns(0.2)	ns	ns	ns(0.1)	ns	0.05	ns(0.2)	ns
C	差	−0.89	−0.69	−2.49	−0.55	0.20	−1.60	0.34	−1.80	0.14	1.94
	t	1.337	0.851	2.374	0.460	0.242	1.501	0.309	1.678	0.093	1.635
	df	205	185	170	167	80	65	62	45	42	27
	level	ns(0.2)	ns	0.02	ns	ns	ns(0.2)	ns	ns(0.2)	ns	ns(0.2)
R	差	0.61	1.66	1.25	0.14	1.05	0.64	−0.46	−0.41	−1.51	−1.10
	t	1.179	2.558	1.522	0.147	1.360	0.662	0.431	0.352	1.175	0.717
	df	205	185	170	167	80	65	62	45	42	27
	level	ns	0.02	ns(0.2)	ns	ns(0.2)	ns	ns	ns	ns	ns
I	差	−0.78	−2.67	−0.44	0.21	−1.89	0.34	0.99	2.23	2.88	0.65
	t	0.976	2.609	0.978	0.148	1.449	0.221	0.612	1.131	1.391	0.301
	df	205	185	170	167	80	65	62	45	42	27
	level	ns	0.01	ns	ns	ns(0.2)	ns	ns	ns	ns(0.2)	ns
B	差	1.80	3.06	1.20	3.64	1.26	−0.60	1.84	−1.86	0.58	2.44
	t	2.351	3.149	0.989	2.588	1.133	0.452	1.265	1.129	0.322	1.249
	df	205	185	170	167	80	65	62	45	42	27
	level	0.02	0.01	ns	0.01	ns	ns	ns	ns	ns	ns
L	差	−0.05	−0.32	−1.05	−4.05	−0.27	−1.00	−4.00	−0.73	−3.73	−3.00
	t	0.087	0.443	1.181	3.922	0.309	0.973	3.530	0.592	2.744	2.184
	df	205	185	170	167	80	65	62	45	42	27
	level	ns	ns	ns	0.001	ns	ns	0.001	ns	0.01	0.05

（注）　グループ番号　Ⅰ＝学生（20歳），Ⅱ＝現職（20〜24歳），Ⅲ＝現職（25〜29歳），
Ⅳ＝現職（30〜39歳），Ⅴ＝現職（40〜65歳）

グループⅠ（学生，20歳）とグループⅡ（現職保育者，20歳代前半）とでは，博愛(B)で学生の平均得点が高い。グループⅠとグループⅢ（現職，20歳代後半）とでは，学生の方が承認(R)と博愛(B)で高いが独立(I)で低い。グループⅠとグループⅣ（現職，30歳代）とでは，学生が同調(C)で低い。グループⅠとグループⅤ（現職，40歳以上）とでは，学生が博愛(B)で高く指導(L)で低い。グループⅡ（20代前半）とⅢ（20代後半）及びⅡとⅣ（30代）の間には有意差がみられない。グループⅡとⅤでは，40歳以上が指導(L)で高い。グループⅢとⅣでは，20代後半が承認(S)で高い。グループⅢとⅤ及びⅣとⅤでは，いずれも40歳以上が指導(L)で高い。

これらを発達的変化として考察すれば，次のように言えるであろう。①学生から現職で最も若いⅡのグループへの変化では，博愛(B)が減少する以外はあまり差がなく，ほぼ共通したイメージがもたれており，②現職の20代前半と後半では顕著な差がない（やや独立で増加し承認が減少する）が，③学生と20代後半との間にはかなりのちがいがみられる。博愛(B)と承認(R)の減少であり，独立(I)の増加及び支持(S)にやや増加の傾向がみられる。これらは先にTable 2で比較した学生と現職とのイメージの相違と殆んど一致している。次に④20代後半から30代への変

化は，支持(S)の減少と同調(C)にやや上昇傾向がみられる。⑤30代から40代以上へは，指導(L)の増加が顕著であり，やや同調(C)が減少するようである。

今少し長期的にみるならば，学生から20代前半へさらに後半へと一貫して博愛(B)と承認(R)の減少傾向がみられる。一方，支持(S)と独立(I)の漸増傾向がみられる。しかし同調(C)と指導(L)には殆んど変化がない。博愛(B)と同調(C)については，学生では相対的に(B)が高く評価されているが，20代後半で両価値は殆んど一致し，同じ重みづけとなっている。なおここで接近した両価値は30代からさらに40代以上へも差のないままで推移している。

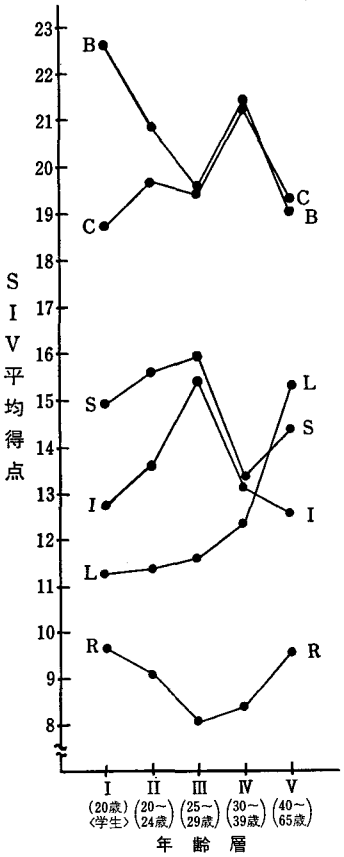

Fig. 1 望ましい保育者像の発達

博愛(B)と同調(C)がほぼ同程度に評価されるように，支持(S)と独立(I)も20代後半から30代においては殆んど一致した重みづけとなっている。ところでこのB・CとS・Iは，20代後半で相互にやや近づく傾向もみられるが，30代では逆に離れる。すなわちB・Cを重要視する反面，S・Iは相対的に低く評価されるようになる。

40代以上のグループで指導Lが急増するが，これは他のどの年齢層よりも有意に高いもので特徴的なことである。また，30代で上昇傾向のみられた博愛(B)と同調(C)には減少傾向がみられる。

これらのことから，望ましい保育者のイメージにはいくつかの年齢層によるちがいがあることが明きらかとなり，それはまた発達的に変化する様子がみられた。

20歳代は現職のなかで最も資料数が多いので，これを前半と後半とに二分したのであるが，この間には著しい差はみられなかった。

20歳代といえば，資料数に比例するように実数的にも最も多い年齢層で，この世代が園の中でも中心的な役割を果たしていると思われる。これを学生と比較すれば，そのイメージにはいくつかの異なる面がみられたのである。すなわち学生時代の理想主義的傾向から，幼児との直接的接触の経験とか園での対人関係を通じて意識のひろがりがあると考えられ，博愛や承認を重視する度合は相対的に低くなるが，他面独自性を重視するようになる。こうした傾向は，いわば現実的望ましさの方向へ変化するものといえよう。

30歳代では，さらに組織体の中での同僚や上司との対人関係を重くみるようになるものと思われる同調的価値を重視する傾向が目につく。これは中間管理者的立場を反映しているものと思える。

40歳代以上は，他の人たちの行動に責任をもち，他の人たちの上に立つという指導的価値を特に重視する傾向が顕著であり，管理的立場を反映しているものと考えられる。

菊池の理想的教師像の研究の中でも理想像の発達的変化を認めているが，年齢的変化とほぼ対応していることから，世代による価値の差異を反映したものと考察されており，理想像を考える際に考慮された具体的な人間関係のひろがりの差異が問題となると指摘している。Table

7にはこの菊池の研究の中から本稿に関係があると思われるグループを抄録した。

Table 7　理想的教師像のＳＩＶ平均値と標準偏差　（菊池1972より抄録）

グループ	n	S	C	R	I	B	L
大　学　生 （2・3年生，女）	48	15.8 (3.6)	13.7 (3.9)	8.5 (2.6)	19.4 (5.1)	19.9 (4.3)	12.5 (3.2)
保育専門学院 （2年生，女）	43	17.0 (4.8)	16.0 (3.5)	7.5 (3.1)	17.3 (4.9)	19.2 (4.2)	13.0 (3.8)
小学校教師 （平均34歳，女）	14	16.0 (3.9)	17.6 (3.1)	10.2 (5.0)	15.9 (3.7)	17.1 (6.2)	11.8 (3.9)

統計的処理を経た比較は試みていないが，小学校教師グループの理想的教師像と本稿の20歳代後半グループの望ましい保育者像とはかなり相似したものであることは興味深い。

ともあれ本研究でも，対人関係での行動を決定する判断の枠組みとしての価値に対する評価の世代の差を反映し，あるいは具体的な人間関係のひろがりの差を反映していると考えられるイメージに差異があることと，発達的変化がみられることが明らかになった。

要　約

本研究は，望ましい保育者のイメージについて，徳目的な条件を挙げるだけにとどまらない新しい資料を提供することを目差し，短期大学に在学する保育専攻学生と保育の現場で毎日実践されている現職保育者とについて，それぞれの描く望ましい保育者のイメージを調査することによって，保育者自身のパーソナリティとの結びつきを，さらには具体的保育・教育行動とのつながりを明らかにしようと試みたものである。

ＳＩＶでは因子的に独立であることが確かめられている対人関係における６つの価値が測定される。その測定は形式的には強制選択法をとるため，社会的に望ましい方向に偏ったり，他人の意見に賛成してしまいがちな傾向から影響を受けることは少ない。したがって被調査者のパーソナリティと結びついた資料がえられる。また方法的にはイメージ調査法をとることで間接的に自分の態度が表明される。

保育専攻学生または現職保育者の描く望ましい保育者のイメージは，博愛的価値や同調的価値を高く評価し，承認的価値は低く評価するものであったが，これは発達的に変化することがみられ，特に学生と現職保育者とのイメージには差異があった。また年齢層による望ましいイメージの特徴を明らかにし，発達的変化を検討した。この発達的変化は具体的な保育・教育行動を通しての経験の深まりと密接な関連があるものといえる。

＜付　記＞

調査の実施にあたり心よくご協力いただきました各園の諸先生皆様に厚くお礼申し上げます。また資料の収集にご助力いただきました本学の奥山道枝・正木節子両先生に心から感謝申し上げます。

文　献

Gordon, L. V. 1960 Manual for Survey of Interpersonal Values. Science Research Associates.
Gordon, L. V. & Mensh, I. N. 1962 Values of medical school students at different levels of training. J. educ. Psychol., 53, 48—51
平松芳樹　1972　志望専攻別対人関係価値の比較研究—短大生の場合—，中国短期大学紀要第3号，33—40
平松芳樹　1973　保育科学生における対人関係価値の発達的特質，中国短期大学紀要第4号，29—32
菊池章夫　1963　対人関係価値の測定(1)　福島大学学芸学部論集，8—14
菊池章夫　1972a　理想的教師像についての一資料— Q-typing による検討—，教育心理学研究 第20巻第3号，184—189
菊池章夫　1972b　望ましい教師像についての一調査，児童心理第26巻第7号
大羽蓁および平松芳樹　1971　対人関係価値の発達と地域性。中国四国・九州心理学会連合第四回大会論文集，16—17

ABSTRACT

This study was to investigate the ideal teacher of child nursing by the SIV (Survey of Interpesonal Values).
There have been many studies that enumerate the virtues as ever, but this study must be expected to obtain a new data on images of the ideal teacher connected with personality trait.
More discussion was made about the relation between the ideal images and teachers' behavior in their actual nursing and teaching.
Subjects were 156 students of Child Nursing Course, Junior College, and 111 registered teachers of child nursing.
They were requested to respond SIV from the viewpoint of the ideal teacher of child nursing.
The SIV consists of six value domains, factors of which are proved to be independent and can weigh subjects' evaluation of those values. These values are Support, Conformity, Recognition, Independence, Benevolence and Leadership.
Main results are summarized as follows:

(1) The synthetic data (Table 1) indicates the images. The data shows that Ss place high value on Benevolence and Conformity, and low value on Recogniton.
(2) Table 2 provides comparisons between the groups of students ($n = 156$) and actual teachers ($n = 111$). Significant differences are found on Benevolence, Recognition and Conformity. It may be said that these differences arise in developmental variation.
(3) Table 5, Table 6 and Fig. 1 show that developmental variation was found among groups of different ages. This developmental variation reflects difference of generation and of extension of actual human relation.

The present findings suggest the hypothes that increasing experience in actual nursing and teaching should change "idealism" tendency.